

中谷義和教授オーラルヒストリー

聞き手：赤澤史朗（本学部教授）

國廣敏文（産業社会学部教授）

赤澤 では、始めます。私が生い立ちや大学の学部時代と立命館の時代を担当しますので、國廣先生は大学院時代と中大時代を担当してください。はじめに、お生まれからうかがいたいと存じます。

中谷 1942年6月7日生まれです。よもやま話をすると、立命館に赴任したときに、「法学会」の新任教員のインタビューを受けたことがあります。その折に、「42年6月とは、どんな時代でしたか？」と尋ねられて、「ミッドウェー海戦で日本が敗戦に向かう分岐点に立っていた頃である」と答えて、原稿を見たら「ミッドウェー“開戦”」となっている。「海戦」と書けないんだなと思ったことがあります。もっとも“会戦”という言葉もありますね。

赤澤 学生が知らなかったんですね。小学校は何年に入学ですか？ また、どのようなご家庭でしたか？

中谷 小学校に入ったのは1949年4月で、富山県東砺波郡般若野村（当時）の小学校です。源平盛衰記に出てくる地名で、義仲が倶利伽羅へ向かう途中で人馬の渴きを癒すために放った矢で湧水を得たと伝えられる清水で育ちました。農村部で、やや里山にかかる地域にあたります。父は1945年7月30日に浜松で戦死しています。艦砲射撃による戦死と聞いています。兄弟姉妹はいません。というのも、母も1947年1月に亡くなっているからです。

赤澤 小学校に入る前にご両親が亡くなられた？

中谷 残念ながら両親の顔は全く覚えてはいません。父は45年4月に出征して、兵役には4カ月だけしかついていなかったことになります。

赤澤 応召して直ぐに戦死されたのですね。

中谷 祖母が言っていましたが、手紙でも来たかと思ったら、戦死公報が届いたとのことでした。1通の手紙もなかったというわけです。20代末に亡くなっているでしょう。母は戦後の医療事情が悪いなかで盲腸をこじらせて病死しています。叔父のところで育ち、叔父の一人娘が私よりも下に生まれています。そんなわけで、両親の50回忌の法要を私が52歳のときに行なっています。

赤澤 養子縁組が何かされたのですか？

中谷 それはありませんでした。般若野小学校は1クラスだけで、48人いました。男子24人、女子24人です。一年生の担任は中村静子先生で、ご主人は、ご結婚後まもなくフィリピンで戦死されています。そんな時代だったのですね。当時、農繁期の田植えと稲刈りの時期には学校が休みになります。そのため、夏休みは1週間短くなりました。

赤澤 それなら先生は、今でも農業はできるのではないですか？

中谷 方式や形態が違いますから見当はつきませんが、いつ頃に種モミを水に入れて発芽しやすいようにするとか、いつ頃に植えたらよいかということは知っています。できたら、米作りとはいかないまでも、田舎に帰って野菜栽培はおこなってみたいものと思います。

赤澤 中学は何年に入学されましたか？

中谷 1955年に入学しています。4カ所の小学校から集まっていました。家から歩いて30分ほどのところにあります。また、高校には1年遅れて、1959年に入学しています。

赤澤 何か事情があったのでしょうか？

中谷 中学生の頃は野球に明け暮れていて高校受験に失敗し、しばらく高岡市内で住み込みの店員などをしていました。

赤澤 当時の高校進学率は低かったのでは？

中谷 半分くらいでなかったかと思います。大学進学者となると、小学校の同級生48人のうち、私とお寺の住職の息子さんの2人だけです。

赤澤 では、中学を卒業後は、多くの人たちが就職するわけですか？

中谷 そうです。女子は紡績工場に行く場合が多かった時代です。近江絹糸の問題が起こったのはその頃ではなかったかと思います。高校は県立砺波高等学校です。

赤澤 高校の時の思い出は？

中谷 いろいろありますが、山に登ったことです。立山に行くとか、医王山に登ったことを覚えています。

赤澤 雪山なんかも？

中谷 冬は行きませんでした。ほとんど独りで登っていたことにもよります。

赤澤 大学には何年に入学されたのですか？

中谷 1962年です。

赤澤 進学の志望はどんなものだったのでしょうか？

中谷 進学希望はありましたが条件にはなかった。だけど、卒業の間際になって、担任の先生が進学することを勧めてくださっただけでなく、想像もできないような援助を頂いたのです。たとえば、受験料をそろえ、浦和にいらっしゃる妹さんのもとへ行くと、米と味噌を持たせて送り出してくださいました。

赤澤 ずいぶん肩入れしてくださったんですね。

中谷 人生の転機でした。今でもそのように思います。

赤澤 もし、その方がいなければ、大分違ってきましたか？

中谷 全く違っていたと思います。

赤澤 恩師ですね。何という方ですか？

中谷 水野光雄という物理の先生です。卒業式も近づいてきて、就職しようかと思っていると話すと、「当面はどうかするから進学しろ」とおっしゃって、ほとんど私大の受験期も終わっている状況のなかで、それほど勉強もしていたわけではないのですが、明治大学の政治学科に進学することになりました。

赤澤 政治学を選んだのは何か理由があったのでしょうか？

中谷 やっぱり政治に興味があったことによると言えます。大学で勉強することができるなら、政治学を学びたいと思っていました。生まれがアジア・太平洋戦争のさなかでしたし、小学校の低学年時代は占領下でしたでしょう。そういうこともあって、少しは政治に対する関心が生まれていたのではないかと思います。この頃の記憶として講和条約の発効があります。それは52年のことですが、紅白の饅頭が配られたのです。これがうまかったということです。当時はまだ砂糖が貴重で、サッカリンで代用していた時代です。サッカリンは今でも使用されていますか？

赤澤 今は禁止です。

中谷 サッカリンのほかにズルチンというものがあったが、甘いのか苦いのかわからない代物でした。野いちごや桑の実の甘さは知っていましたが、砂糖の甘さに改めて気づいたということでしょう。60年安保も政治に対する興味という点では、そのインパクトになったと思います。政治にリバイアサン性を感じたということでしょうか。

赤澤 60年安保の運動も、富山で経験なされたのでしょうか？

中谷 そうです。当時は高校生でしたが、どの政党か知りませんが、お百姓さんが田んぼをしているところで「安保反対」のピラを配っているという状況でした。

赤澤 では、戦争に対するいろんな思いが、政治に対する関心を喚起することになったということでしょうか？

中谷 それもあるかもしれませんが、いずれにしても、時代を動かす力というか、人々を一定の方向に誘導していく権力というか、これはどういうことなんだろうという関心はあったということになります。

赤澤 大学へ進学後は、将来の進路をどのように考えていましたか？

中谷 あえて言えば、ジャーナリズムが政治の世界にかかわりたいと思っていました。研究者になりたいという希望は、あったとしても、よくわからないということもあって、想定しだしたのは途中からのことであっ

たと言えます。

赤澤 話題は大学時代に移っていますが、学生時代の思い出について聞かせてください。

中谷 4年間で、ありがたいことに、卒業できました。というのは、上回生の頃はほとんど学校に行かなかったからです。何をしていたかという、ほとんどアルバイトに明け暮れていました。いろんなアルバイトをやりました。例えば、ゴムのホースをつくったり、菓子屋さんに飴をつくりにいったり、あるいはベニヤ板をつくったりしました。お中元の配達もやりました。他にもいろいろあります。

赤澤 4年間で卒業できたということは、勉強で頑張ったということですね。

中谷 それなりに少しは勉強していて、下宿に帰ってからは努めて本は読むようにしていました。

國廣 大学時代に学ばれたことで大きかったのは、社会勉強ということになりますか？

中谷 そう思います。院生時代のことですが、知り合いで土建関係の社長がいて、そのもとで、当初は資材置場の警備員をやっていたのですが、そのうちに社会保険関連業務のアルバイトに回ることになりました。それは、主として、出稼ぎの人達を相手としていて、九州の志布志の一带、新潟の新発田地方と東蒲原の山間部、福島と岩手や北海道の農村地帯の出身者です。彼らは、農繁期が終わった秋にきて田植えの頃に帰ります。工事現場としては根岸の地下鉄工事や市川の高架工事、鹿島の臨海工業地帯や印旛沼周辺の上水道関連工事でした。新幹線の目黒川工区にもかかりましたから鉄道関係が多かったのですが、私は、当時、千葉に住んでいまして、毎日、通っていたわけでもなく、好条件で働いていました。

國廣 では、首都圏のインフラ整備にあたられたわけですか？

中谷 そうなります。離職表をつくり、職安の手続きをとったり、彼らの

健康保険証を作ったりすることでした。というのも、彼らは秋に来て、田植えの頃に帰るというパターンが多く、その間は失業保険を受給します。また、健康保険は今とは違って、当時は全額保険料でまかなえたので、彼らは、赴任すると、まず、歯を治療します。事故にも対処していました。現場の事故は主として元請の主任があたりましたが、私はその補助をしたり、交通事故に対処していました。

國廣 労務関係的な役割だったわけですね。大学で勉強するより、そちらで社会政策的なことも含めて、社会の仕組みを学ばれたということになりますか？

中谷 そう思います。「俺たちは都会の肥やしだ。冬の冷雨のなかの仕事には切なくなる」と言っていたことをよく覚えています。また、私が事務所にいたとき、ある出稼ぎの人の娘さんから電話を受け、呼び出したことがあります。彼は、電話を受けつつ泣き出すのです。娘さんが大学に合格したとの朗報なのです。私ももらい泣きしました。受験期になると思い出すことです。

赤澤 学生から院生にかけてアルバイトをして、辛かったとか大変だったということはありますか？

中谷 それが、幸い、あまり辛いとは思わなかったけれども、とりわけ学生時代はいつも空腹であったという思いが強いです。

赤澤 上京後の住まいはどこでしたか？

中谷 最初は千葉県鎌ヶ谷市の遠縁のところでした。船橋から東武野田線に乗り換えて約15分のところでした。次いで浦和に友人と一部屋に、やがて独りで住んでいました。3・4年次は、あまり出席できませんでしたが田口富久治先生のゼミに属していました。9人のゼミで、現在、土佐清水の市長を務めている西村伸一郎君や藤枝征司君（故人、元流通経済大教授）もいました。ゼミではウェーバーとマルクスを中心としていて、『職業としての政治』やミルズの『マルクス主義者たち』などを読みました。後者は、当時、翻訳がなく、原文で読みました。

赤澤 大学院へ進学しようと思ったきっかけは何ですか？

中谷 アルバイトで忙しくて、それほど就職活動もしなかったし、少しは勉強しようと思ったことにもよりましょう。

國廣 大学院入学後はアメリカ政治を専攻されていますが、当初からその目的で入学なさったのですか？

中谷 そのようなことは考えてはいませんでした。進学については田口先生に相談はしなかったのですが、入学後にお会いし教示を受けることになります。当時、田口先生は助教授で、大学院は担当なさってはいませんでした。私の指導教授はフランス右翼政治の研究で有名な木下半治教授です。忘れられない思い出のひとつですが、御茶の水駅前の茶店で田口先生に「何をやるか」と尋ねられて、「反動の思想を研究したいと思っていますが、だれを、あるいは何を対象にしたらよいか迷っています」と答えたら、では「カルフーンをやってみたら」との答えが返ってきました。なぜカルフーンなのか、わからなかったんですけど、田口先生が国会図書館の泉昌一さんとホーフスタッターの『アメリカの政治的伝統』の翻訳をなさっていますが、そのなかでカルフーンは「支配階級のマルクス」と位置づけられているので、カルフーンということになったのではないかと思います。ただ、この点については、その後、40年以上もご指導を受け続けることになりますが尋ねることはなかったと思います。そういうことでカルフーンを、ひいてはアメリカと向き合うことになりました。

赤澤 それも転機ですよ。

中谷 そのとおりです。数日を経て、田口先生がアメリカ思想史研究のための文献目録を作ってくださいましたが、その折に、昨日（1月21日）葬儀があった斎藤眞先生が『国家学会雑誌』に「カルフーンにおけるナショナリズムとセクショナリズム」という論文を発表なさっていることも教えてくださいました。そこで勇気を出して先生に電話をしました。大変に寛大なことに、「じゃ、いらっしゃい」とおっしゃって、東大の

研究室に伺いましたら、あたたかく迎えてくださったうえに、『カルフーン全集』をお貸し下さったのです。

國廣 それはいつ頃に出版されたものですか？

中谷 1850年代です。いまでこそ新版の全集がありますが、鹿革の背表紙版です。お会いした折に、「カルフーンをどのような視点から研究なさるのですか？」と尋ねられて、「反動の思想でカルフーンを考えているのですが」と答えると、「南北戦争への“動”という点ではそうかもしれないが、思想史の脈絡からすると、少し疑問が残るように思えますが」ということで、「丸山（眞男）さんは、どのように思われるかなあ」とおっしゃったことを覚えています。

赤澤 丸山眞男は「反動の思想」を書いている。

中谷 そういうことで、田口富久治先生と出会えたことは、私にとって別の転機になったと言えます。

國廣 研究のテーマとしてはカルフーンという、かなり特殊なテーマを選ばれたわけですが、研究は独りでなさったのですか。研究会に出たりするということはなかったのですか？

中谷 カルフーンの研究は個人的にやらざるをえませんでした。しかし、田口先生が私を含めて藤枝君と渡辺俊彦君（現、中央大教授）の3人を呼んで勉強会を方南町のご自宅で開催してくださいました。毎木曜日の午後1時から始めて6～7時まで行ない、その後は研究や政治をめぐる、奥様の手料理をいただきつつ歓談しました。

赤澤 どれくらい続きましたか？

中谷 2年、続けました。独文ではシュミットの『政治神学』やローゼンベルクの『民主主義と社会主義』を、また、英文ではケーブランとラスウェルの『権力と社会』などを読みました。いずれも翻訳がなかった頃です。『権力と社会』は今も翻訳はありません。また、学外との交流もでき、油井大三郎さん（東大教授を経て、現、東京女子大教授）や多くのアメリカ研究者とも知り合いとなったり、陸井三郎さんの研究会にも

出席するようになりました。

國廣 マスターからドクターにストレートに進んで、修士論文をさらに発展させることになったのでしょうか？

中谷 修士論文も学位論文もカルフーンでまとめました。ドクターコースには5年くらいいたかと思います。

赤澤 74年に学位を取得なさっています。ドクターの院生の頃に非常勤をなさることはなかったのですか？

中谷 してはいません。相変わらず、土建会社でアルバイトしながら論文をまとめていました。

國廣 学部と大学院の時代に移っていますので、私が代わります。振り返ってみて、大学院の頃に印象深かったことをお聞かせください。明治大学の和泉校舎の生協の2階で結婚の祝賀会が行なわれ、田口先生が立会人になり、フレンドリーに催されたと先輩から聞いています。何年のことですか？

中谷 68年のドクターコースの1年のときです。翌年に娘が生まれ、当初は浦和に、その後、千葉に住んでいました。

國廣 奥さまとの馴れそめは私も知っています。大学生の夏休みに中谷青年が故郷の村に帰るでしょ。家の直ぐ近くに鎮守の森の神社があって、中谷青年がリンゴ箱を置いてそこで勉強している。その神社の裏に奥さまの実家のお宮があって、奥さまは、そのお宮にお供えと掃除をしに行っていた。そこで勉強をしている中谷青年に「何を勉強しているの？」と話しかけたことから始まったという話を聞いています。私も10数年前に中谷先生とその場所に行ったことがあります。とても静かでいい場所でしたよ。

中谷先生に最初にお会いしたのは、私が学部生の頃でした。当時、先生は非常勤講師として明治大学へ出講なさっていて、私がお初の受講生です。また、大学院進学を目指していたので、千葉のご自宅へ英語を習いに行きはじめたのもその頃です。

中谷 30歳のときに都留文化大学で非常勤の講師を始めていますが、大学で話をはじめた最初だと思います。1973年の春のことです。

國廣 田口先生がボランティアに学生や院生に指導なさったように、中谷先生は教えを乞うと断らないですね。私も毎週、日曜日に中谷先生のお宅にお邪魔して、相当に長時間英語の勉強をやりましたね。夕食も御馳走していただいたりして。オコンナーなどの本をテキストに使っていました。

中谷 平野孝君(現、龍谷大教授)も一緒であったと思います。

國廣 私も田口ゼミ生ですから、師匠からいうと、田口先生の“一番弟子”、“第一世代”が中谷先生で、僕は“第三世代”になるのかあ。私たちだけでなく、中谷先生は、中大時代も立命館に来て、学生・院生の面倒みがい先生です。中大の専任に決まった時、田口先生から「中谷は苦節10年だっなあ」と何回も聞かされました。田口先生の弟子の中では、最も田口先生からの信頼の厚い先生で、「何かあったら中谷に相談してみろ」と絶対の信頼をおいていましたね。

赤澤 都留文科大学以外での非常勤は？

中谷 専任になる前に中大などへも非常勤で出講し、その縁で77年に中大の助教授になっています。

赤澤 中央大学の経済学部専任教員になって、どんな科目を担当なさいましたか？

中谷 政治学や社会科学特論などを担当していました。中大には非常勤を含めて13年ほどいたのではないかと思います。

赤澤 中央大学に移ってからの研究と生活についてお聞かせください。

中谷 人生の一番いい時を過ごさせていただいたと思っています。30代～40歳半ばのことですから。懐かしい時代です。

赤澤 研究者として脂が乗ってくる時期ですからね。

中谷 乗ってくるというか、身体も元気でしたからね。一番いい時期でしたよ。

國廣 当時、中大は多摩に移っていますが、確か先生もご自宅を引っ越されましたね。

中谷 そうです。國廣先生は引っ越しの手伝いに来てくださいましたね。

中大は78年に八王子に移っていますが、大学の引っ越しは大変でした。

反対も強く、反対派の学生との対応に苦労しました。

赤澤 首都圏の大学が郊外に移る時期にあたりますね。

中谷 ハシリのような感じであったと思います。赴任したばかりで責任ある立場ではありませんでしたが、試験の時など、受験阻止派への対応に追われていました。

國廣 多摩移転反対勢力からですか？

中谷 そうです。入り口をガードしないといけないし、バリケードを組んで試験場の確保もしなければなりませんでした。

赤澤 身体を張って、ということですね。

中谷 大げさに言えば、そうなります。多摩に移ってからも続けました。

試験が執行できなくてレポートに切り換えるという事態もしばらく続きました。

國廣 中大時代の他の思い出を聞かせてください。

中谷 いろんな人間関係が生まれ、楽しく過ごせたことです。

赤澤 どういう人間関係でしたか？

中谷 同僚との結びつきもあったし、学外も含めて、努めて研究会に出るようにしていたので、その席で多くの知人も得ました。単著を出したのもその頃であったと思います。

赤澤 そうです。79年に、『J.C. カルフーンの政治理論』が出版されています。

中谷 学位論文に手を入れて出版しました。また、御茶の水書房が合評会を設定してくださって、田中浩先生（現、一橋大名誉教授）が司会を務めてくださいました。

國廣 カルフーンの政治理論をまとめ終えて、アメリカ政治思想からアメ

リカの政治全体に視点が移っていったのではないかと思いますか？

中谷 そうだと思います。それは、国家論に興味を持ち出すなかで、資本主義国家としてのアメリカの政治が関心のひとつになっていったのだと思います。また、その方面の仕事が求められることになったことにもよります。アメリカ政治学史に取り組みだしたのは立命館に来てからだと思います。立命に来て初めての論文が「戦後アメリカ政治学序説」でした。アメリカ政治学の個別研究は蓄積されていたのですが、少なくとも日本ではアメリカ政治学を学史として整理したものがなかったので、担当学科目との必要もあり、政治学の基本概念の理解も含めて取り掛かったのだと思います。

赤澤 単著、編著、翻訳を見ると、82、83年にメリアムの『アメリカ政治思想史() ()』の翻訳を出されています。立命に移られたのは87年です。90年代に国家論関係に、ごく最近ではグローバリズムに関係するものが多いですが、そのへんから関心が移り、広まっているという印象を持ちます。

中谷 話は前後することになりますが、中大時代に「社会科学研究所」が発足し、小林丈児先生のもとで現代国家論部会がありました。小林先生がお亡くなりになってからは、私が中心のひとりとならざるをえなかったことにもよります。

國廣 千葉での勉強会は、八王子に引っ越されても続いていて、私が先生の近所(京王線沿線)に住んでいたこともあって、毎週のように通いました。英文のほかに、フランス語の文庫クセジュでアメリカ関係の本を読んだことを覚えています。

中谷 私もそのことでフランス語を学びました。千葉から駿河台に通ったのは1年ですから、78年の3月に八王子の長沼に越しています。

國廣 中大では組合の役職もされているのですか？

中谷 書記次長を、また、辞める前の1カ年は学生部の委員も務めています。中大の状況は話したとおりでしたから、学生部の委員はもっと大変

でした。

國廣 学生から睨まれ、反動だと言われたわけですか。

中谷 吊るし上げにあったこともありました。

國廣 その頃の思い出として、色んな大学の学生間の交流も盛んでしたね。

岡山大にいらっしゃった佐々木一郎さん（現在、横浜市大名誉教授）やそのゼミ生、田口ゼミ（明大）、小林丈児ゼミ（故人、当時、中大教授）、高橋彦博ゼミ（法政大、現在、法政大学名誉教授）など、大学間の政治学研究会が開かれていて、西尾敬義さん（現在、札幌学院大教授）や彼と結婚することになる藤江さん（当時、都留文大学生で中谷先生の教え子）も参加していました。それは3年くらい続いたと思います。

中谷 場所は定かではありませんが、1度、参加した記憶があります。

國廣 他には、当時、京大の学部生だった後房雄さん（現、名古屋大教授）や岡本仁宏さん（現、関学大教授）も参加していたと思います。

中谷 国家論にかかわりだした頃に立命に移っているのではないかな。

ジェソップやミリバンドの翻訳も、その頃だったと思います。

赤澤 中央大学で忙しく、華々しくやっていた時に、なんで立命に来られたのですか？

中谷 理由はいろいろありますが、86年に福井英雄先生や中村義孝先生がお訪ねくださって、「政治行政コースを発足させるつもりだ」とおっしゃって赴任を求められ、その後、畑中和夫先生も来てくださいました。関東に30年近くもいたから京都へ行ってみようかと思いましたし、「平和と民主主義」を教育理念としているのはどういう大学なのかという興味もありました。また、立命出身の同僚にも勧められました。そんなことで「行こうか」という感じになったということです。87年の赴任ですから、池田誠先生や岡崎長一郎先生とは学部を同じくすることはありませんでした。

赤澤 では、先生の立命館大学時代を区切るとどのようになりますか？
例えば、前半と後半に分けるとすると。

中谷 この3月で21年間勤めることとなりますが、94年秋から95年秋までのトロント外留期で分けることができると思います。というのも、外国人研究者との交流も深まり、ガネル特別教授(ニューヨーク州立大)の知見も借りてアメリカ政治学史の整理に乗り出し、「草創期」から出発することになったし、グローバル化の問題ともかかわりだすことになるからです。また、教職員組合の委員長や生協理事長も務めることで他学部の教員や職員のかたがたとの交流も深まりだすこととなります。

國廣 グローバル化の問題に関心が移られたのはいつ頃ですか？

中谷 2000年の「国際(世界)政治学会」がケベック市で開催されていますが、その折に、知人のレズニック教授(UBC)が運営委員をしていますが、「グローバル化時代の民主主義について、日本の立場から話してくれ」という依頼を受け、それでグローバル化について考えざるをえなくなったということがあります。その席ではフランス、イギリス、オーストラリアの研究者と私の4人で報告したと思います。もうひとつは、ヘルド教授(LSE)の翻訳を幾冊が作りましたが、彼も民主主義論からグローバル化の問題に関心が移っていたということもあり、私も歩調を合わせるようになったことにもよります。これはグローバル化のなかで国家をどう捉えるべきかという問題とも結びついていました。とりわけ、グローバル化のなかで国家が解体するのではないかという理解もありましたが、私は、必ずしも、そうはならないだろうと思っていました。だが、では、グローバル化のなかで国民国家をどのように位置づけ、民主主義をどのように展望するかということについて考えざるをえなくなったのだと思います。

赤澤 ジェソップ、ミリバンド、カニンガムの著書を翻訳されていますけど、これらの人々をどのように評価されますか？

中谷 評価するとなると難しいことですが、どのように学んだかとなると、いくつかあります。70年代に「ミリバンド プーランザス」論争がありまして、この問題については田口先生が詳細な検討を残されています。

両者の論争に決着がついたとは思えませんが、プーランザスからは、改めて国家の概念やその「自律的機能」について、また、ミリバンドからは「正統化機能」について学ぶことになったと思います。ジェソップ教授（ランカスター大）の理論もプーランザスの影響によるところがあります。ジェソップとは長い付き合いで、本学へも幾度かシンポジウムで来日していますし、この3月末にも来校します。ランカスター大学を訪ねた折に湖水地方や牧草地帯を、とりわけ、ラスキンの叙景地を案内してもらったことは楽しい思い出です。カニンガム教授（トロント大）は長い間の友人で、94年～95年の外留期には彼の研究室を使わせてもらいました。彼の著書も3冊翻訳しましたが、民主主義理論について多くを学んだと思います。とりわけ、「民主主義の拡大適用」という考え方には、「後見主義」の克服という点からも大いに興味を覚えました。彼の先生のマクファーソンとは2度、東京で会っていただけに、外留中に奥様の案内で彼の書斎の椅子に座して追想したことを思い出します。また、カニンガム教授が、昨年、産業社会学部の客員教授として来校した折に、富山の犬牧温泉や白川郷を旅した楽しい思い出もあります。いずれにしても、マルクス主義の影響を受けつつも西欧自由主義者が持っている理論的柔軟性を彼に感じています。

赤澤 一方では西欧のマルクス主義を、他方ではアメリカの政治理論の研究をなさっているわけですが、冷戦の崩壊の受け止めた方は論者によっていぶん差があると思うんですが、この点はどうでしたか？

中谷 かなりの差があったと思います。簡単に言えば、いわゆるソ連型社会主義をどう評価するかという点では議論や理論的対立状況が底流していたと思います。これは日本のマルクス主義者やマルクス主義的潮流の政治学者のあいだにだけでなく、国際的にも議論の分かれるところであったと思います。80年代からのポーランドや東ドイツにおける動きはベルリンの壁の崩壊から91年のソ連の解体へと向かうわけですが、現存社会主義体制については、歴史観もからんでさまざまな評価があったと

言えます。私はソ連を研究していたわけではありませんが、それほど積極的に評価したことはなかったと思います。受け止め方としては、後知恵かもしれませんが、社会主義の新しいありようがあるのではないかと考えていました。それがどういうものかとなると、今も考えていることです。ただ、ソ連型社会主義、別の言い方をすれば国権型社会主義とか党と国家が一体化した社会主義とは違う社会主義がありうるのではないかと考えています。とりわけ、市場中心型社会ではなく、市場経済を組み込み、民主主義の伝統を踏まえた社会主義像はありうるのではないかと。この問題は田口先生が「多元的社会主義」というイメージを提起されたときに、かなりはっきりと意識したことであったと言えましょう。

國廣 1年間のカナダでの在外研究は一つの大きな転機だったと思います。あの在外研究をきっかけに、中谷先生は気軽に海外に出かけて行って、いろんな研究者とのネットワークをつくられたのではないかと思います。

中谷 歴史学的政治学を志すものにはあるまじきことですが、正直言って、実は、私には妙な諦観主義や達観主義みたいなところがあって、人間がやっていることは世界中そう変わらんだろう、と思っていたこともあって、中大を辞めるまで海外に行ったことがなかったのです。52歳で初めて海外に出かけることになったわけです。外留生活を経験するなかで変化したことといえば、美術館に出向くことになったことです。きっかけは、カニンガム夫妻にすすめられてトロントで「バーンズ・コレクション」を見たことです。美術史の名画をじかに観ました、その後、学会でボストンを訪ねた折には美術館へも行きました。とりわけ、東洋コレクションは岡倉天心が中国日本部長として肩入れしたこともあってか、そのコレクションには驚きました。その後、学会などでニューヨークやシカゴを訪れた折にも、また、ロンドンとコペンハーゲンを訪ねた折にも美術館へ寄っています。どこも変わらないと思わないで、なるべく若い時に海外を見た方がよいと思います。そのなかで日本の固有性も見える

わけですから。この点では國廣先生がおっしゃるように、海外に出かけるのを面倒がらずに、努めて出掛けるようになったと言えます。

赤澤 人文研、国地研とかのかかわりはどんなものでしょうか？

中谷 国地研の運営委員を務めることはあったように思いますが、プロジェクトにかかわることはなかったと思います。人文研のかかわりという点では、中島茂樹所長を中心とした「グローバル化と公共性」という部会があって、今も、このチームの一員です。また、「グローバル化と現代国家」というプロジェクトが組まれたことがあり、その作業から安本典夫先生と一緒に『グローバル化と現代国家』（御茶の水書房）を編集しています。また、ジェソップ、マッグルー（サザンプトン大学）、オーゴー（コペンハーゲン・ビジネス・スクール）などの教授を招聘し、シンポジウムを企画したり、報告者やディスカッサントの役を務めています。

國廣 中谷先生の強みは外留をきっかけとしているのかもしれませんが。いろんな研究者と直接会ってコミュニケーションをとり、信頼関係を築きつつ研究を続けていらっしゃる。先生はよくおっしゃっていましたが、「著者がどんな顔をしているか、顔を見ないとスッキリしない」と。相手の本だけでなく、人物そのものを確かめようとなさるところがありますね。相手も、「じゃあ、彼となら本を書こう」とか、海外から来ようとかということになったように思います。

中谷 それは、そうですね。ただ外国人と信頼関係を築くということは難しいことです。この点では、幸い、とても優れた研究者にめぐりあえたと思っています。また、何人かの優れた研究者を客員教授として招くことができたのも、出掛けて行って、拙い英語で話すなかから人間関係をつくることに努めたことによるのではないかと思います。

國廣 ところで、釣りがご趣味とか？

中谷 高校の頃から山に登るようになって、いつの頃からか溪谷の美しさに引かれだすんですね。そして、子供の頃に、近所の川や池で鮒を釣っ

たこともあり、釣ってみようかということになったのだと思います。

赤澤 自然が好きなんですね。川釣りですか？

中谷 海で釣りをしたことはありません。自然が好きなのかもしれません。

自然のなかで釣りをしているという感じです。とりわけ、水の流れが好きですから。

赤澤 何を釣られるんですか？

中谷 渓流釣りです。でも、この何年か行ったことがありません。テントを張って友人と瀬音を聞きながら酒を酌み交わすということは実に楽しいものです。定年になったら、少しは山や川へ出掛けることにしたいと思っています。

國廣 研究をまとめると伺っていますが、今後の抱負をお聞かせください。

中谷 どこまでできるかは別としても、ひとつは「草創期」に次いで「形成期」のアメリカ政治学をまとめることです。これは今年度中に終えなければならないと思っています。その次に、「展開期」と「戦後期」に移らなければなりません。また、「グローバル化と国家」の問題についても引き続き考えていきたいと思っています。

赤澤 最後の質問となりますが、残っている教職員、学生に何か一言を。

中谷 最初に申しましたように、赴任した頃には教職員が一体となつて一つの学園をつくらうという雰囲気が強かったと思います。それが、このところ弱くなっているのではないかと懸念しています。学園は一つの組織体ですから、学びと教育や研究の条件を皆でつくっていかないと、学生のためにも教職員のためにもなりません。働き甲斐のある、学び甲斐のある学園をつくってほしいと思っています。

赤澤・國廣 では、これで終わります。長時間にわたり、ありがとうございました。

(このインタビューは2008年1月22日に行なわれました)